



一方、三原医師が課題として挙げるのは、Net4Uにかかわる医療、福祉関係機関の数が伸びないこと。ネットワークに参加してカルテを活用している診療所は35施設。共有が必要な診療科目も考えられるが、同医師会に所属する診療所は約100施設あり、全体の30%程度の参加にとどまっている。

三原医師は「Net4Uを使うことによって仕事が楽になるわけではない。その上、法律上義務付けられている従来の紙のカルテと併せて二重登録しなければならない問題があり、作業の手間が増えて

### 医療と介護の連携に期待

が相談し支え合うことで不安や負担の軽減、ミスの防止にもつながる」と語る。

荘内病院と医師会が中心となって進めている緩和ケアを提供する態勢づくりも、Net4Uの普及にプラスに働いているという。

緩和ケアでは、がん患者が

直面する心身の苦痛を取り除き、生活の質を保ちながら自分らしく過ごすことを重視する。このため、患者は在宅療養に向かうケースが多く、病院の専門医、地域のかかりつけ医、看護、介護など各分野の連携が不可欠になる。

専門医は退院時、カンファ

しまう」と要因を分析する。

ただ、最近になってケアマネジャーや介護スタッフが増えた。Net4Uを活用できるようになった。「ケアプランや生活面の情報を共有することで医療と介護の連携を高め、適切なサポートの提供に役立つ

はず」と三原医師。今のところ数人のケアマネジャーが活用を始めており、今後増えていくことを期待している。

Net4Uは別の課題も抱えている。運用開始から10年が経過し、より使いやすく、多くの情報を分かりやすく整理できるシステムへの更新が必要になってきている。

現状のシステムでは、ライ

レンスの内容とも電子カルテを作成し、かかりつけの診療所に紹介する。これまで病院側では、退院後の患者の経過をタイムリーに把握するのは難しかったが、Net4Uはそれを可能にし、病状の急変時や難しい判断が求められる状況にも対応できる。

は、患者が利用して

電子カルテに登録されている患者の総数は年々増加しており、2005年に7533人、08年に1万4365人となり、11年2月1日時点で2万4000人を超えた。

このうち、複数の医療機関で情報を共有しているのは5875人となっている。

Net4Uは、在宅医療の分野で特に有効に機能している。患者の在宅での治療、療

養にかかわる医療関係者は、

# 鶴岡地区医師会 Net4U

## 在宅医療で有効活用

### 診療情報共有の展望を聞く



Net4Uを操作する三原医師

鶴岡地区医師会（中目千之会長）では、患者が利用している地域医療機関の担当者同士がコンピュータネットワークを使って診療情報を共有するシステム「Net4U（ネット・フォー・ユー）」を運用し、本格導入から今年で10年目を迎えた。現在、電子カルテの登録患者数は2万4000人を超えており、特に在宅医療の分野で、主治医、訪問看護師、薬剤師、ケアマネジャーなどが情報共有やコミュニケーションツールとして利用している。がん患者の在宅療養を支える緩和ケアに取り組んでいることも普及を後押ししている。一方、まだ使っていない医療、福祉関係者に積極的な利用を促すとともに、より使いやすいシステムへの更新が必要になってきた。現状と展望を同医師会副会長でプロジェクトリーダーの三原 一郎医師に聞いた。

### 患者の経過を適時把握

Net4Uのネットワークに参加している医療関係機関は、鶴岡地区医師会に所属する35診療所のほか、鶴岡市立荘内病院、市立湯田川温泉リハビリテーション病院などの中核病院5施設、訪問看護ス

テーション「ハローナース」と「ぎずな」、介護老人保健施設、特別養護老人ホーム各1施設、調剤薬局4施設、同医師会立の荘内地区健康管理センターと民間検査会社3社など。

電子カルテに登録されている患者の総数は年々増加しており、2005年に7533人、08年に1万4365人となり、11年2月1日時点で2万4000人を超えた。このうち、複数の医療機関で情報を共有しているのは5875人となっている。

Net4Uは、在宅医療の分野で特に有効に機能している。患者の在宅での治療、療

主治医、訪問看護師、薬剤師、ケアマネジャー、療法師、介護福祉士など多職種にわたる。その際、電子カルテには患者の基本情報以外に、医師の診察と薬剤処方の内容、訪問看護師の訪問時の処置、患者とのやりとりや受けた質問などがその都度書き込まれ、情報が共有される。

電子カルテ上では、現場での疑問や気づき、相談事項を伝えることもできることから、担当者同士のコミュニケーションツールとしての役割も果たしている。

PDF形式のデータや写真のファイルを送付することで患者の様子や病状、患部の変化を目に見える形で伝えたり、その場で主治医に相談したり、処置の指示を仰ぐこともできるようになった。

投薬について責任を負う薬剤師は、実際に患者に会う機会が少ないが、カルテで処方内容の推移や症状の変化を見ることができ、主治医に薬の種類や量のコントロールを提案することもできる。

三原医師は「各分野の担当者が、患者に関する最新の状況をリアルタイムに把握できるようにになったのは非常に有用。在宅での処置や看護は孤独になりがちだが、スタッフ

センス契約の関係で新しい機能を追加したり、フォーマットを改変することができないことになっている。そのため「何とか費用工面し、本年度中に実施のめどをつけたい。更新するならばバージョンアップではなく、自由度や柔軟性の高い新システムへの切り替えを想定している」と語る。

Net4Uを運用することによって、地域の医療、福祉関係者が効率よく情報を共有でき、互いのコミュニケーションも活発になってきている。それを可能にするのは「顔が見える関係が基盤にしっかりとあればこそ」と三原医師は強調する。「患者により質の高い医療を提供するために努力する」という理念をあらためて伝え、地域に根差した医療、福祉の連携を実現したい」と展望する。

### Net4U(ネット・フォー・ユー)

Net4Uは、医療機関、訪問看護ステーション、介護施設、薬局などが施設や職種の垣根を越えて連携しながら、市民に安全で効率的な医療を提供するため、経済産業省の「先進的IT活用による医療を中心としたネットワーク化推進事業」の採択を受けて鶴岡地区医師会が開発。2002年1月に運用を始めた。

電子カルテは、患者本人の同意のもとに作成し、同医師会内にあるサーバーで一括管理している。カルテを閲覧したり、内容を追加記載できるのは、患者が利用している医療機関や訪問看護ステーションなどの施設の担当者に限られ、情報が外部に漏れないような対策も施している。

10年度には、ウェブカメラを使った会議システム機能を追加。現場に携帯できる医療用端末パソコンを導入し、在宅医療、介護の関係者同士が現場で打ち合わせしたり、医師が遠隔診療できる環境を整えた。ただ、これまで10回程度の活用事例があるものの、日常的に使う状況になるのはまだこれからという。